

いのちにあって支配する

【聖書箇所】 5章 12～21 節

はじめに

●前回は、ローマ人への手紙 5章の前半を通してイエシュアを信じた者たちに備えられている祝福がどんなものであるか、その一面を学びました。その箇所をさっと読むだけでも、神が罪のゆえに、私たちと敵となっておられるのではなく、私たちの味方となってくださっていることに心打たれます。したがって、主にある者たちは暗く悲しそうな生き方をすることなく、キリストの救いにあずかった者として、むしろ希望と喜びに満ちた生き方をするようにと励ましているのです。

●そのことを私たちが確信できるように、「なおさらのこと」(9, 10 節)という言い方でパウロは強調しています。私たちがかつて「弱かったとき」「罪人であったとき」「敵であったとき」、イエシュアは私たちのために死んでくださいました。だとしたら、「なおさらのこと」、神の子とされている今、神があなたを愛し、あなたの味方となって、「おりにかなった助け」を、またあなたに関するすべての必要を満たしてください。さらなわけがありませんか。パウロは「なおさらのこと」という表現の中に、私たちの神は尽きることのないあふれるばかりの恵みを備えておられる方であるということ強調しているように思うのです。

●今回は、ローマ人への手紙 5章 12 節以降の部分(後半の部分)において、アダムとキリストを比較し、類比しながら、キリストの力のすばらしい勝利を高らかに宣言しています。パウロはここでも、「それにもまして」(15 節)とか、「なおさらのこと」(17 節)という表現で、キリストの力に満ちた勝利を語ろうとしています。

1. 5章 17 節の箇所のさまざまな訳

【新改訳改訂第3版】

もしひとりの違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。

【口語訳】

もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さらに力強く支配するはずではないか。

【新共同訳】

一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。

【柳生訳】

ひとりの人の罪のために、そのひとりの人間によって、死は支配権を確立するに至った。だが、神がひとりの人イエス・キリストを通してなされたことはそれよりもはるかに強力である。だから、罪人を受け入れて下さる神の豊かな恵みと賜物とをいただいた者は、イエス・キリストを通して、生命の中であって、支配することができるのである。

以下、最後の部分のみを引用します。

【NTD 訳】 生命の世界に君臨するのだ!!

【詳訳聖書】 王として支配するというのは、はるかに確実なことなのです。

【L.B】 いのちの王となります。

●以上の訳を比べて分かることは、まずひとりの人(アダム)の罪によって、死はその支配権を確立するに至った。だれもこの支配から逃れる者はいない。しかしイエシュアを通して、神の豊かな救い(罪の赦し、無罪放免という無代価の贈り物)をいただいた者は、いのちであって支配するのです。つまり、イエシュアのいのちによって、はるかに勝った仕方で、さらに生き活きと力強く、しかも王のごとく支配することができる者とされた(されている)という事実なのです。王のごとく支配するとはどういうことか。それは王が命令を下すこと—それが実行されることを当然のこととして信じてなされるように—によって支配するのです。それが王としての権威といわれるものです。

●ここで大切なことは、死を支配する者(王)は一人ですが、いのちであって支配する者(王)とは、神の救いの恵みを受け入れるすべての者であるということです。神の救いの恵みのゆえに、一人ひとりがみないのちによって死さえ支配する者となるということです。これはイエシュアの復活によって与えられた永遠のいのちが死の力を打ち破る力を持っているからです。

2. いのちであって支配する

●私たちはもう少しこの点について注目したいと思います。確かに、キリストは十字架の死と復活の出来事を通して、死に勝利されました。そして終わりの日に、キリストが再臨される時、死は完全な形で滅ぼされます。しかしながら、ここの「いのちであって支配する」というのは現在形です。今置かれている環境・現状の中で、いのちであって力強く支配することが可能であるということです。この支配の力の源泉は、私たち自身の中にはありません。その支配する権威と力は、キリストのうちにあります。しかもその支配は王のごとく権威をもった支配です。

●何を支配するのでしょうか。神に敵対するすべての勢力に対しての支配です。今、イエシュアは御座において私たちのためにとりなしをしておられますが、その御座におけるとりなしの目的は、単に私たちがこの世において守られるということだけでなく、主の御名の権威を私たちが用いることによって、主のみこころがこの地にも実現することなのです。今や主は神の右の座に着き、私たちの大祭司として、休むこ

となく、とりなしのわざを続けておられます。その主がご自分の民に、ご自分のとりなしのパートナー(同伴者)として、とりなしのわざにあずかるように天来の力を用いることができるようにされたのです。

●イエシュアは、ピリポ・カイザリヤというところで、ご自分が何者であるかを弟子たちに問いました。すると弟子の筆頭格のペテロはこう言いました。「あなたは、生ける神の子キリストです。」(マタイ 16:16)。するとイエシュアは「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と言って、続けてこう言われたのです。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 16章 18～19節

18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。

ハデスの門もそれには打ち勝てません。

19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。

●ここで言われている「天の御国のかぎ」とは何でしょうか。これこそが「イエシュアの御名」そのものであり、この世のすべての支配と権威、権力、主権に勝ったすばらしい力ある御名なのです。この「かぎ」なくして、私たちは教会の門を開けることもできないのです。人々を救いに導くこともできないのです。また、サタンのあらゆる策略にも打ち勝つことができないのです。

●パウロはコロサイ人への手紙の中で、「・・・父なる神に喜びをもって感謝をささげることができますように。神は私たちが暗やみからの圧制から救い出して、愛する御子の支配の中に移して下さいました。」(1:12～13)。ですから、すでに私たちはイエシュアのご支配の中にあるのですから、サタンは私たちが支配したりする権利は全くないのです。むしろ私たちがサタンを支配することができるのです。そのような支配する権威を持っているのです。敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けられているのです。

●この権威は祈りの中で用いられます。イエシュアは十字架にかかれる前の訣別説教の中で、ご自分の弟子たちに繰り返し(7回も)語られました。

「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光を

お受けになるからです。」・・・「わたしの名によって、わたしの名によって」・・・です。イエシュアの力ある御名、栄光ある御名によって、求め、そして要求するのです。それは私たちの喜びが満ち満ちたものとなるためです。

●初代教会は「イエシュアの御名によって」支配しました。一見、そこでは迫害がありました。「イエシュアの御名によって語ってはならない」とも言われましたが、彼らは恐れることなく、イエシュアから頂いた「天の御国のかぎ」、すなわち「イエシュアの御名」によって福音を語り、多くの者たちを救いに導きました。そのようにして、主の教会は前進して行ったのです。

- ここで、「ハーザー」という雑誌に掲載された中国でのリバイバルの報告を引用したいと思います。

1) 宣教師の追放

●毛沢東はその生存中に、中国を共産主義にしようとしていました。しかし、彼にとっていちばん大きな問題はキリスト教だったのです。新しい共産主義の社会をつくるためには、なんとかしてキリスト教を撲滅しなければならないと考えていました。そこで彼がまず考えたのは、宣教師たちを中国から追放することでした。そしてそのようにしました。中国の教会の人々はがっかりしました。これまでのすべてのサポートを失ったからです。ところがそのことによって、中国の教会は祈りへと導かれたのです。それまでは祈る必要はさほど要りませんでした。しかし彼らはすべての肉の力に頼ることをやめて、祈ることをはじめたのです(つまり、クリスチャンたちが「天の御国のかぎ」を用い始めたということです)。

2) 教会の封鎖

●宣教師たちを追放してもクリスチャンたちはまだ信仰を持っている。信仰をなくするために、毛沢東は教会堂を全部封鎖して、クリスチャンたちが集会できないようにしました。ところがそのことによって、クリスチャンたちは教会という建物から、外に出て行くようになったのです。
(初代教会に似ています)

3) 指導者たちの投獄

●そこで毛沢東は、あらゆる指導者たちを捕らえて投獄し、取り除こうとしました。そこで教会はいよいよ切に祈るようになり、信徒たちが立ち上がるようになりました。

4) 西洋医学の排除

●毛沢東が西洋医学を排除したことによって、人々は神のいやしの御業にふれることになりました。

5) 聖書の没収

●毛沢東は聖書を教会やクリスチャンたちから取り上げ、没収し、それを焼き捨ててしまいました。しかしクリスチャンたちがそのことによって聖書のことばを暗記するようになったのです。彼らはみことばそのものに曲をつけて賛美するようになりました。

●こうした勝利の背後には、クリスチャンたちの隠れた武器である熱心なとりなしの祈りがあったのです。一人の違反によって、罪がこの世界に入り、その罪によって死が支配するようになりました。ひとりの行為が多くの人々に死をもたらし、暗やみを招いたのです。中国では毛沢東というひとりの人によって死が覆いました。しかし、イエシュアの恵みと義の賜物を豊かに受けた人々は、ひとりの人イエシュアによって、いのちにあって、王として力強く支配しているのです。イエシュアの御名によって、天の御国のかぎをもって支配することができるからです。何と驚くべきことでしょうか。天の御国のかぎを預けられたクリスチャンが、ひとりひとりイエシュアの御名によって祈り、とりなしをはじめると、聖霊の力あるわざを私たちは見るようになるのです。すばらしい神のみこころがこの世においてなされ始めるのです。そ

のことを信じたいと思います。

●ここで、Ⅱコリント4章を思い起こしましょう。パウロはこう言っています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント書 4章8～11節

- 8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。
- 9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。
- 10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。
- 11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

●ここに、いのちにあって支配することがどういうことかを見ることができます。最後に、ローマ人への手紙5章15節には、「神の恵みとイエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれる」とあります。アダムの犯したひとつの違反は、まさに小さな家の畳の上に落ちたタバコの火が街中の家を猛火で包んでしまうような力をもっていたとすれば、神とイエシュアの恵みによる賜物は、その街中の火をすべて静めるばかりか、一軒一軒の家を全部新しい家にしてしまうほどの力をもっているのです。火が消されるだけでなく、それぞれの家が元通りの家になるだけでなく、決して火事で燃えない材料で建て直されることを意味します。何というすばらしい神の恵みでしょうか。

●私たちの代表であるアダムは、当初、この地とそこに満ちているものすべてを支配する権威を与えられていました。しかしアダムが罪を犯したことにより、その支配権をサタンに合法的に売り渡してしまったのです。しかし今、キリストにある者たちは、このサタンの支配権のもとにはいないのです。なぜなら、「神はイエス・キリストを通して、私たちを暗やみの圧制から救い出し、愛する御子のご支配の中に移してください」からです。それゆえ、私たちはイエス・キリスト(イエシュア・ハマシアツハ)にあるいのちにあって、ますます支配する者となりましょう。

1994.11.27